



日本学術振興会アジア研究教育拠点事業

東アジア海文明の歴史と環境

ニュースレター

# 海雀



# Umi-Suzume

第1号

2006. 06. 10

巻頭の言 鶴間和幸..... (2)

「国際学術シンポジウム『黄河下流域の生態環境と東アジア海文明』を終えて」

村松弘一..... (3)

第1回 東アジア海文明セミナー 報告者 韓昇・呂静 ..... (4)

第2回 東アジア海文明セミナー

報告者 張東翼・禹仁秀・洪性鳩・崔弘昭・李志淑..... (5)

第3回 東アジア海文明セミナー 報告者 趙榮光 ..... (9)

コメント：「東アジア海文明における食を通じた文化交流」天野恵美子 ..... (10)

「高麗神社一日韓関係史のある断面」崔弘昭 ..... (11)

「中国東北地区調査記」下田誠 ..... (12)

彙報..... (13)

随想..... (14)

編集後記..... (15)

学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1 tel : 03-3986-0221 (内線 5743)

<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>

# 事業のスタートにあたって

コーディネーター 鶴間和幸

現在全国の大学では世界最高水準の研究教育拠点をめざす「21世紀COEプログラム」や「特色ある大学教育支援プログラム」など、競うように文科省、日本学術振興会の研究教育の大型プロジェクトに挑戦している。学習院大学は残念ながら、これらに関わることは出来なかった。しかし私たちが採用されたアジア研究教育拠点事業は、英語ではAsian Core Programといい、日本学術振興会（独立行政法人）が立ち上げたアジアにおける世界的水準の研究教育の構築を目指すものといえる。とくにアジアの諸国と共同して研究教育の拠点作りをするものであり、大きな期待がかかっている。学習院大学はパートナーとして協定校の中国の復旦大学、韓国の慶北大学校を選んだ。先方の大学も研究助成金を準備することがいわゆるパートナーシップの前提となっている。

アジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」（2005年11月24日～2010年3月31日）の採用通知が届いたのは2005年8月1日であった。今回全国から57件の申請があり、11件がヒヤリングを受け、最終選考で6件が採用された。採用されたテーマを見ると、「ナノ物質を基盤とする学際科学研究教育拠点の構築」「アジア法整備支援のための実務・研究融合型比較法研究拠点」「アジアの最先端有機化学」「日中における薬用植物の育種と標準化および創薬に関する研究教育拠点」「パーム・バイオマス・イニシアティブの創造と発展」というようにほとんどは理系の分野である。9.5倍の難関を突破したのは、研究テーマのユニークさによるものであろう。

プロジェクト名は「東アジア海文明の歴史と環境」とした。日本・中国大陸・朝鮮半島・台湾に囲まれた海域はそれぞれの国の立場から日本海、東シナ海、東海、西海、黄海、渤海など様々な呼び名が飛び交っている。領海をめぐる国家の利権が対立する現在、それらの海を東アジア海という名称に統一し、その歴史と文明を共同で探究していくことが求められている。中国の黄河や長江から発生した文明は、両大河の下流域の平原を経て、沿海部から海を伝って朝鮮半島さらには日本へと伝わってきた。さらに、その文明は相互の交流を通じて「東アジア海文明」とも言うべき高度な文明を築きあげたとも言える。ヨーロッパ世界の地中海にあたるような内海とも言える海域を「東アジア

海」として設定し、そこで形成された「東アジア海文明」の特質と自然環境とのかかわりを考えていきたい。現在、東アジアは政治的に様々な問題を抱えてはいるが、それとは反対に経済的には東アジア共同体として一体化しようという動きもある。本研究交流は、各国の研究者が相互に往来し、過去の東アジア社会の共存のありかたから未来の共存のありかたを「共通の場」で考えてゆくという意味において国際的に重要かつ不可欠なプログラムと言える。

すでに2005年11月27日に200名近い人々を集め、「黄河下流域の生態環境と東アジア海文明」の国際シンポジウムを開催した。そこでは東アジア海文明構築へ向けて温かい支援の輪が出来つつあるのを感じた。今後は環境とネットワークの2つのセクションに分けて独自の研究調査を行っていく。黄河下流域の三角州や東アジア沿海の海港の調査を三国共同で行い、引き続いて中国と韓国でもシンポジウムを開催していく。また参加研究者が情報を共有するため、多言語で同内容のホームページ及びブログを立ち上げる。三カ国語のブログはすでに完成した。中国・韓国の研究者を招聘して学術交流セミナーを開き、共同調査・研究等に基づく共同シンポジウムを開催する。とくに、最終年度は海上シンポジウム開催し、日本・中国・韓国を巡航することも考えている。研究成果の市民への発表の場として日本・中国・韓国の文化財をあつめ「東アジア海文明展」を日本で開催する計画もある。インターネットによる講義（ネット・キャンパス）を行うことも考えている。共同調査・シンポジウムの準備を現地研究者と綿密にすすめるために、東京・上海・大邱にインターオフィス（交流事務局）を開設し、若手研究者をインターフェロー（交流研究員）として相互派遣する。

すでに中国の研究者は「東亜海文明」、韓国の研究者も「東아시아海文明」ということばを使い、本研究にたいして大変熱心である。私自身の研究は、黄土高原、黄河下流域と移動し、ついに海洋にぶつかったという気持ちである。海の地勢図を見ると、日本列島はユーラシア大陸の一部であることに気づく。中国から大陸棚が東に延び、日本列島はその末端にあり、日本は日本海溝で太平洋とは隔離されている。海は人間を隔てるものではない。

# 国際学術シンポジウム「黄河下流域の生態環境と東アジア海文明」

学習院大学東洋文化研究所助手 村松 弘一

2005年11月27日、学習院百周年記念会館にて本事業が共催する国際学術シンポジウムが開催された。学習院大学東洋文化研究所の一般研究プロジェクト「黄河下流域の生態環境と古代東アジア世界」（代表研究員：鶴間和幸）の2年間の研究成果発表の場であるとともに「東アジア海文明の歴史と環境」の共同研究のスタートであった。当日は200名以上の研究者・市民の皆さんが集まり、このテーマに対する社会的関心が主催者の認識以上に高いことがわかった（当日の報告者および内容については下欄を参照）。

人間は自然環境の影響を受けつつも、また逆に自然環境に影響を与え、「文明」を形成してきた。今回のシンポジウムでは中国文明の起源のひとつと考えられる黄河下流域

という場を設定し、当該所における人間と環境の歴史を、環境史・移民史・水利史・民族史・環境考古学など様々な切り口から研究した成果の報告がおこなわれた。黄河下流域は北の遊牧社会、南の農耕社会、さらには東方の海へと開かれた地域である。そこは多様な文化を受け入れる場であると同時に、そこで育まれた「文明」は人々の移動や環境の変化によって大きく広がってゆくこととなったのである。東アジア海文明史というものがあるとするならば、それを考える上で、黄河下流という地域における環境と人間の関係史を考察することは今後も重要であると言えるだろう。なお、本シンポジウムの報告内容は出来るだけ早い時期に単行本として出版することを予定している。

## 【報告題目一覧】

### 第一部 古代東アジア世界における黄河下流域

- 鶴間 和幸（学習院大学文学部・教授）  
黄河と東アジア海文明の歴史と環境
- 葛 剣雄（復旦大学歴史地理研究中心・教授）  
移民から見た黄河下流域の外向傾向の変遷
- 森部 豊（関西大学文学部・助教授）  
4世紀～9世紀の黄河下流域におけるソグド人
- 市来 弘志（学習院大学・非常勤講師）  
魏晋南北朝時代におけるギョウ城周辺の牧畜と民族分布
- 長谷川順二（学習院大学大学院）  
衛星画像を利用した黄河下流域古河道復元研究  
—大名・館陶を中心に—

### 第二部 考古資料からみた黄河下流域

- 榎 豊実（山東大学歴史文化学院・教授）  
黄河下流地区竜山文化城址の発見と早期国家の発生
- 王 建華（吉林大学遼寧考古研究中心・博士后研究員）  
山東省仰韶時代の人口規模と環境変遷
- 菅野 恵美（文教大学・非常勤講師）  
黄河下流域における画像石の分布
- 益満 義裕（南京曉庄学院・外国人専門家）  
車馬坑から見た黄河下流域の社会と文化

### 第三部 ポスターセッション—黄河下流域への視角

- 中村 威也（東京都立大学大学院修了）  
歴史地理学における大縮尺地勢図の利用  
—外邦図・民国図・黄河下流域1万分の1図をもとに—
- 久慈 大介（中国社会科学院考古研究所研究生院）  
中国古代における黄河中・下流域  
—その地理的環境と文化の動態—
- 水野 卓（慶応義塾大学大学院）  
黄河から見た春秋時代の領域認識  
—中下流域諸国を中心に—
- 下田 誠（東京学芸大学・非常勤講師）  
戦国趙の邯鄲遷都と禹河—その研究史的考察—

### 第四部 黄河下流域の環境変遷と人々の暮らし

- 王 子今（北京師範大学歴史系・教授）  
漢魏時代黄河中下流における環境と交通の関係
- 浜川 栄（共立女子大学・非常勤講師）  
『水経注』に見える「絶」について  
—漢～北朝時代の黄河下流域の環境と社会—
- 大川 裕子（日本学術振興会・特別研究員）  
黄河下流域における沙地利用の歴史の変遷  
—沙丘平台から落花生導入まで—
- 村松 弘一（学習院大学東洋文化研究所・助手）  
澤からみた黄河下流の環境史—鉅野澤から梁山泊へ—

### コメント

#### 〔韓国史から〕

- 張 東翼 慶北大学校師範大学 〈高麗史〉  
禹 仁秀 慶北大学校師範大学 〈李朝史〉

#### 〔中国史から〕

- 黄 曉芬 東亜大学総合人間文化学部 〈中国考古学〉  
呂 静 復旦大学文物与博物館学系 〈先秦史〉  
韓 昇 復旦大学歴史系 〈隋唐史〉  
洪 性鳩 慶北大学校師範大学 〈明清史〉

### 【運営組織】

- 主催：学習院大学東洋文化研究所  
共催：日本学術振興会アジア研究教育拠点事業  
「東アジア海文明の歴史と環境」  
(学習院大学 [日本]・復旦大学 [中国]・慶北大学  
校 [韓国])  
助成：学習院国際交流基金  
協力：学習院大学史学会

## ◇第1回東アジア海文明セミナー「東アジア海文明における文化交流」

日時：平成17年11月24日（木） 13:00～14:30  
会場：学習院大学 北2号館6階 人文科学研究所会議室  
(621号室)

報告者：

韓昇氏（復旦大学歴史系教授）

呂静氏（復旦大学文物与博物館学系専任講師）

参加者：13名

### 【紹介記事】

第1回東アジア海文明セミナーでは、中国側拠点機関である復旦大学歴史系教授・韓昇氏と同じく復旦大学文物与博物館学系専任講師・呂静氏より報告が行われた。韓昇氏は主著に『日本古代的大陸移民研究』（文津出版社、1995）、訳書に『隋唐帝国と東亜』（堀敏一著、韓昇・劉建英訳、雲南人民出版社、2002）、『隋唐仏教文化』（礪波護著、韓



昇・劉建英訳、上海古籍出版社、2004）など。2004年12月13日（月）学習院大学文学会主催特別講演会においても「聖徳太子と隋—『隋書・倭国伝』の解釈を中心とする」と題する報告を行っている。呂静氏は主著に『春秋時代の盟誓に関する基礎的研究』（2003年度東京大学博士論文）、主要論文に「盟誓における載書についての一考察」（『東洋文化』81、2001）、「盟誓における載書の書式に関する一考察」（『中国哲学研究』18、2003）など。

当日は韓昇氏より近年、復旦大学において開催された中日関係に関するシンポジウムや今後の出版計画（東アジア世界に関する日本側・朝鮮韓国側の基本史料と研究書の翻訳計画）などについて、ご報告いただいた。

呂静氏は「関于八～九世紀唐与吐蕃間盟誓的考察」と題する報告を行い、唐代東アジア世界を構成する諸国にみえる秩序構造へと議論を展開する方向性を示された。



## ◇第2回東アジア海文明セミナー「東アジア海文明における文化交流」

日時：平成17年11月29日（火） 13:00～14:30  
会場：学習院大学 北2号館10階 大会議室

報告者：

張東翼氏（慶北大学校師範大学教授）

禹仁秀氏（慶北大学校師範大学助教授）

洪性鳩氏（慶北大学校師範大学専任講師）

崔弘昭氏（慶北大学校師範大学非常勤講師）

李志淑氏（慶北大学校大学院博士後期課程）

通訳：辻弘範（学習院大学東洋文化研究所助手）

参加者：17名

### 【紹介記事】

第2回東アジア海文明セミナーでは、韓国側拠点機関である慶北大学校師範大学の張東翼氏・禹仁秀氏・洪性鳩氏・崔弘昭氏・李志淑氏と研究交流を進めた。慶北大学校は釜山と仁川を結ぶ韓国中南部の大邱に位置し、歴史科では朝鮮半島と日本の交流史もさかんに研究されている。当日は各自の研究計画が報告された。詳細は5頁～9頁を参照。なお、当日の講演原稿をそのまま掲載した。

## 10 世紀高麗王朝の三省六部制の受容過程

慶北大学校師範大学歴史教育科教授 **張 東翼**  
(チャン・ドンイク)

みなさまこんにちは。

私は慶北（キョンブク）大学校師範大学歴史教育科の張東翼です。まず初めに、私をはじめ、私どもの大学の教授と大学院生を、貴大学が推進している「東アジア海文明の歴史と環境」の課題に参加させていただいたことと、今回のご招待に対して、感謝の意を申し上げます。

「東アジア海文明の歴史と環境」に参加することになる、私どもの大学側の教授は5名、大学院生は2名です。それぞれの研究者が考えている研究のテーマは確定したものではありませんが、おおむね次のとおりです。これは、研究者の専攻時期と関連して大きく2つの課題に区分することができますが、その第一は、「9～10世紀東アジア海をめぐる中・日・韓三国の文化交流」です。これに該当する研究テーマは5つで、論文の仮テーマは次の通りです。

①任大熙教授（イム・デヒ：東洋史、唐代史専攻）：「唐律の日・韓両国への伝播過程」

②李文基教授（イ・ムンギ：韓国史、古代史専攻）：「9～10世紀日・韓両国における唐制の受容と定着」

③張東翼教授（チャン・ドンイク：韓国史、中世史専攻）：「10世紀高麗王朝の三省六部制の受容過程」

④崔弘昭講師（チェ・ホンジョ：韓国史、古代史専攻）：「9世紀新羅の政治動向と張保臯（チャン・ボゴ）の海上活動」

⑤大学院生・李志淑（イ・ジスク：韓国史、中世史専攻）：「10～12世紀高麗王朝における唐・宋律の受容」

第二の課題は、「15～19世紀の東アジア海」ですが、これに該当する研究テーマは2つで、論文の仮テーマは次の通りです。

①禹仁秀助教授（ウ・インス：韓国史、近世史専攻）：「朝鮮後期海禁政策の施行とその性格」

②洪性鳩講師（ホン・ソング：東洋史、明清時代史専攻）：「近世東アジア世界交流に寄与した人々」

以上7つのテーマを担当することとなる研究者のうち、

①任大熙、②李文基の両教授は現在、韓国内で公務の出張

中ですので、残りの5人が今回の発表に参加することになりました。

次に、私自身の研究課題について、簡単に紹介をしたいと思います。私は韓国中世史を専攻しており、中でも高麗王朝（918～1392）の政治史と対外関係史を研究していますが、これと関連する成果としては、『高麗後期外交史研究』（一潮閣、1994）、『元代麗史資料集録』（ソウル大学校出版部、1997）、『宋代麗史資料集録』（ソウル大学校出版部、2000）、『日本古中世高麗資料研究』（ソウル大学校出版部、2004）などがあります。日本の学界に投稿した論文としては、「1269年大蒙古国中書省の牒と日本側の対応」（史料紹介『史学雑誌』114-8、2005；「The Study of Koryo-period Social and Intellectual History in the Republic of Korea, 1989-1994」, Asian Research Trends. 6, The Toyo Bunko, 1996；「The Study of Koryo-period Political and Economic History in the Republic of Korea, 1989-1994」, Asian Research Trends. 10, The Toyo Bunko, 2000 などがあります。

また、私が研究しようと考えている「10世紀高麗王朝の三省六部制の受容過程」は、高麗王朝の中央政治制度のうち、中国式の三省六部制を受容した過程について検討しようとするものです。この時期を扱っている年代記である『高麗史』・『高麗史節要』などによると、唐・宋の政治制度は第6代国王である成宗（ソンジョン：在981～997）代に初めて受容されたかのように記述されています。ですが、これらの年代記をはじめとした当時の金石文・古文書・同時期に該当する中国側の資料などを綿密に検討してみると、そうでない点も見られます。これらの資料を具体的に検討し、高麗初期になされた三省六部制の整備過程について、新たな見解を提示したいと考えています。

（翻訳：辻弘範）

※訳者注：韓国における「朝鮮時代」とは「李氏朝鮮時代」、日本でのいわゆる「李朝時代」をさします。

## 朝鮮後期の海禁政策とその推移

慶北大学校師範大学歴史教育科助教授 禹 仁 秀  
(ウ・インス)

私は韓国の慶北大学校で朝鮮時代史を専攻している禹仁秀です。初めに、東アジア海文明という大きなプロジェクト研究グループの一員として参加することができたことに對し、深い感謝の意を申し上げます。先日の学習院大学主催のシンポジウムでは、研究の視角を東アジアへと拡張するにあたって多くの示唆を得ました。今後、韓国側でプロジェクトを推進するにあたって参考となる、非常に意義深い時間でした。

私についての紹介の意味で、これまでの私の関心分野と研究成果について簡単にお話ししたいと思います。私は慶北大学校で学部から博士課程までをすべて終えました。初めて学問の道に入った時、私の主な関心分野は朝鮮後期の政治勢力に関するものでした。朝鮮後期の政界において強い影響力を行使していた「山林勢力」についての分析で博士の学位を頂きました。この学位論文は1999年に『朝鮮後期山林勢力研究』（一潮閣）という著書として出版しましたが、これは大韓民国学術院が選定する優秀図書に選ばれたところであります。

政治勢力や政治制度以外に、私は朝鮮時代の生活史にも関心を持っており、数編の論文を発表したりもいたしました。両班（ヤンバン）家の衣食住生活、武人の辺境での生活、妓生（キーセン）の生活相に関する論文がそれです。

特に日本と関連するものとして二本の論文を書いたことがあります。一つは朝鮮前期の対日交渉の窓口であった三浦のうちの一つである蔚山（ウルサン）の塩浦（ヨムポ）を中心として、対日交渉の面での機能について考察したものです。もう一つは、韓国の高等学校の国史教科書に現われる韓・日交流に関する記述の特徴とその変化について考察したものです。これは日本語でも作成し、『大手前大学社会文化学部論集』第4号に掲載されました。上の二つの論文は、私が以前勤務していた蔚山科学大学と日本の大手

前大学との間で、学術交流事業の一環として作成されたものです。

これもご縁として作用し、今日再び、東アジア海文明プロジェクトに参加することになったようです。韓国が東アジアの一員であることは明らかな事実であり、韓国史を研究するにあたり、大部分の研究者たちと同様に、私もこの点を十分に念頭に置いた状態で研究しています。

ただし、私は韓国史をやっている立場ですので、東アジアの中での韓国という点を認めながらも、東アジア史の中での韓国の役割や位置について、より関心を持たざるを得ません。また、韓国の立場から韓国という目を通して、東アジアを見てみたいと思います。

同じ東アジア海といっても、朝鮮の立場は、日本や中国の立場と異なる点が多くあるだろうと考えています。朝鮮は、日本とは海を通るしかありませんが、中国とは陸地でつながり、海上以外に陸上というもう一つの交通路を持っていたためです。それにともなって、対応のあり方も三国の間で互いに異なっていたはずで

こうした基本視角を持って、今後の研究計画を簡単に紹介したいと思います。朝鮮時代後期（17～18世紀）を中心時期として、海禁問題について考察しようと思います。朝鮮の対日本、朝鮮の対中国関係における海禁問題が一次的な関心ですが、主に政治史的な側面から海禁政策をみることに主眼点を置こうと思います。海禁の具体的なあり方、海禁に対する朝鮮政府の立場、海禁の実際における実現の程度、海禁政策が持つ性格と意味それに影響などを盛り込むことができるでしょう。その後は余力があれば、文化交流の側面へと範囲を拡大することにいたします。

いずれにしても、これからは東アジアという巨大な地域の観点と、韓国という国家の観点との間で、より多くの苦悶をしなければならないようです。（翻訳：辻弘範）

## 朝鮮の視角でみた東アジア国際関係の基本構造

慶北大学校師範大学歴史教育科専任講師 **洪 性 鳩**  
(ホン・ソング)

朝鮮時代（中国の明清時代、日本の室町・江戸時代）の東アジア国際関係は、基本的に鎖国的基調の下にありながらも東アジア域内国家間（韓国・中国・日本）の交流と交易は比較的活発になされていた。当時東アジア国際交流の主要な空間としては中国の明・清朝と韓国の高麗・朝鮮の関係、そして中国・韓国と蒙古・女真（満洲）の関係が複雑に交差していた遼東と、中国の明・清朝と日本の室町・江戸幕府および琉球王朝・東南アジア諸国、それからポルトガル、スペインなど西洋諸国が活発な経済交易を展開した中国の東南沿岸、すなわち東アジア海が挙げられる。このほかにも各国の公式使節が集結する北京は中国を中心とする中華的世界秩序を具現する象徴的空間であり、朝鮮の倭館と日本の長崎などは各国で対外交流の窓口の役割をした。

本稿は朝鮮の視角からみた東アジア国際関係の基本構造に対する筆者の初歩的な見解を提示することに目的があるので、まず朝鮮の立場からみた北方の交流空間である遼東と南方の交流空間である東アジア海に限定して論議を展開することとする。

遼東をめぐる北方から展開された国際関係の歴史的推移を概略的に見ると、14世紀の元・明交替期に元—女真—高麗の国際関係が明を中心とする遼東都司—女真衛所—兀良哈蒙古衛所—朝鮮の国際関係に代替され、また17世紀の明・清交替期には後金（満洲）・蒙古の同盟と明—朝鮮の同盟が対立する局面が造成され、朝鮮が丁卯・丙子胡乱を経た後、後金（清）を中心として清—蒙古—朝鮮が連結される新たな国際関係が成立した。

中国の東南沿岸（東アジア海）をめぐる南方の国際関係は、北方に征服王朝である元朝が出現した時期以前までは韓国の三国時代の百済と新羅、そして高麗と中国との関係は主に海上を通してなされた。これは漢族王朝の南遷（南宋）によって南方が社会経済的中心としての位相を持つようになった点とも深い関連がある。したがってこの時期までの東アジア海の国際関係は経済的・文化的交流の性格が強かった。しかし、14世紀中葉ごろに明朝が登場して海禁政策を推進するにつれて東アジア海上の交流と交易は衰退し始めた。朝鮮と中国は基本的に遼東を通した関係だけが維持され、日本と中国の関係も制限された勘合貿易だけ

が許可された。

朝鮮が中国の海禁政策の影響下で19世紀にいたるまで海上を通した対外関係に注目できず、遼東を通した関係に制限されるほかなかった背景には、北方民族の脅威による中国の漢族王朝との政治・軍事的な同盟関係の構築の必要性があった。その結果、朝鮮は朱子学的理念の下で強力な中央集権的統治体制を構築して社会を徹底的に統制したのである。

これを日本の立場と比較すると、日本が中国との関係で要求したのは基本的に経済的・文化的交流であった。しかし、中国の意図はあくまで朝貢—冊封の中華的世界秩序の構築のための政治的側面にあったので、14世紀と16世紀に東アジア海で活動した倭寇も経済的・文化的欲求を暴力的な方法で充足させた側面があるのである。17世紀の江戸幕府の成立以後、日本が鎖国政策を推進しながらも対馬島を通した朝鮮との交流と長崎を通したオランダとの交流を行わざるをえなかったのも、経済的・文化的交流の需要がそれほど強かったためである。

一方、16世紀中葉以来、西洋諸国が新航路を開拓して東アジアに進出し始めたことによって、東アジア海は以前とは全く異なる新たな性格の交流の場へと変貌した。これに朝貢—冊封の中華的世界秩序を具現しようとする中国の政治的な意図は漸次弱まり、西洋諸国の経済的要求を中心として動く新たな東アジア海の秩序が芽生えていた。これは19世紀に西洋諸国が帝国主義化するにつれて、東アジアの屈折した近代化過程に現れた。

それでは朝鮮の立場では北方と南方で互いに別に展開された国際関係をどのように整合的に理解できるのだろうか。16世紀末から17世紀中葉の東アジア国際秩序の大変動の脈絡で見ると、壬辰・丁酉倭乱は16世紀中葉から経済的交流を中心に東アジア海に新たな秩序が形成される過程が日本国内の政治的状況と連結され、暴力的な形態として現れた事件で、成長する海洋勢力が大陸に向かって加えた最初の衝撃であった。これによって大陸勢力の中心であった明朝の東アジア支配構造は深刻な打撃を受けた。このような明朝の危機は大陸秩序の再編につながり、その結果満洲族の清朝が興起して丁卯・丙子胡乱が発生したのである。したがって16世紀末から17世紀中葉は近代的国際関係と

しての移行過程で海洋勢力の登場を予告した時期で、朝鮮は成長する海洋勢力とまだ優勢を占めていた大陸勢力が出会う衝突地帯となった。また当時朝鮮は独立した政体として維持されたことによって、海洋勢力と大陸勢力の緩衝地帯の役割もしたのである。

このような朝鮮の地政学的位置はどのような歴史的脈絡で形成されたのだろうか。高麗中期以前まで韓国は大陸と海洋両面を通して国際関係を構築していたが、元の高麗侵略を契機に北方民族の脅威が現実化されるにつれて韓国は大陸的性格が濃くなり始めた。このような朝鮮の大陸的性格は元・明交替の渦中で固着化され、以後朝鮮は北方民族に対する抵抗論理を盛り込んでいる朱子学的世界観を積極受容しながら中国を中心とする朝貢一冊封の東アジア秩序に積極的に編入され、強力で効率的な中央集権体制を基盤

にした防衛的で守勢的な対外政策の基調を徹底的に維持した。

16世紀以来の大陸勢力と海洋勢力の拮抗関係は19世紀帝国主義侵略を契機として海洋勢力の圧倒的優勢に転換された。1894年の日清戦争と1905年の日露戦争は海洋勢力が大陸勢力を圧倒するようになった状況を克明に示す重大な事件だったのである。以後、日本の朝鮮植民地化と満洲・蒙古進出は海洋勢力の最盛期にあたり、第2次世界大戦直後に発生した韓国の分断は大陸勢力と海洋勢力の平衡関係を示してくれる。したがって今後韓国の統一は大陸勢力と海洋勢力の調和を通してのみなされる課題で、これが平和と共存を基盤にする東アジア新時代の開幕に寄与する韓国の役割になるであろう。(翻訳：島暁彦)

## 9世紀新羅の政治動向と張保臯（チャン・ボゴ）の海上活動

慶北大学校講師 崔 弘昭  
(チェ・ホンジョ)

私は韓国の慶北大学校から来た崔弘昭と申します。最近、韓・中・日の三国で東アジア共同体を指向し、歴史認識を共有するための学問的な努力が進められている中で、このように意味あるプロジェクトに若い研究者の一員として参加することができ、光栄に思います。加えて、今回の学術シンポジウムに招待して下さったことに対し、深い感謝の意を表します。

私は、慶北大学校で学士と修士の学位を取得し、博士課程を修了しました。私の専攻は韓国古代史で、その中でも特に新羅政治史が主な研究対象です。修士学位論文としては、「金欽突（キム・フムドル）の乱と神文（シンムン）王代の政治勢力」（1999.2、指導教授：李文基）を提出し、博士課程に進学してこれを大丘史学会に「神文王代金欽突の乱の再検討」というテーマで発表し、掲載しました（1999.12、『大丘史学』58輯）。また最近、韓国古代史学会で発表したテーマは、『韓国古代史研究』34輯（2004.6）に「新羅哀莊（エジャン）王代の政治変動と金彦昇（キム・オンスン）」という論文として掲載されています。現在の私の主な関心は9世紀新羅の歴史で、博士学位論文もこれを土台として提出する予定です。

そのため、これから続くプロジェクトの研究課題もまた、

これの延長線上で誠実に進めていきたいと思っています。9世紀の「東アジア海」で活発な海上活動を展開していた張保臯（張保高）についての研究がそれです。ご存知のとおり張保臯は新羅人で、唐に入り徐州節度使の主力部隊である武寧軍に入隊し、帰国した後は新羅の西南海地域（全羅南道・莞島 [ワンド]）に清海鎮を設置した人物です。張保臯は、この清海鎮を拠点として東アジア海上貿易を独占し、莫大な富と権力・名誉を得ましたが、彼についての歴史記録は韓国側より、むしろ中国と日本の資料により詳しいと言えるほどの状態です。唐の著名な文人である杜牧の『樊川文集』や歴史書の『唐書』、そして日本の僧侶・円仁の日記である『入唐求法巡礼行記』と、歴史書の『続日本後紀』の記録がまさにそれです。9世紀前半の真の東アジア人（国際人）であった張保臯の海上活動を理解し研究するにあたっては、東アジア的（国際的）観点が必須だと言えるでしょう。そのため私は、「9世紀新羅の政治動向と張保臯の海上活動」というテーマを設定し、私の主専攻である新羅政治史を基礎として、ここに社会経済史・海洋史などの分野にも視野を拡大し、意欲的にこの課題を進めたいと考えています。

ありがとうございました。(翻訳：辻弘範)



## 10～12世紀高麗王朝における唐・宋律の受容

慶北大学校史学科博士課程 李志淑  
(イ・ジスグ)

こんにちは。

私は韓国・慶北大学校大学院史学科の博士課程に在学している李志淑と申します。私の研究分野は高麗時代の法制史で、中でも刑律の分野です。修士学位論文は「高麗後期官人に対する刑罰の研究」ですので、このプロジェクトと関連させて、研究を引き続き行なっていこうと考えています。まずは、10～12世紀の高麗王朝における唐・宋律の受容について調べる方向で行きたいと思えます。

従来の高麗律についての研究動向は、高麗独自の律の編纂説と、中国律の準用説とに分けて見ることができます。前者は、高麗以前の三国時代から、伝統的な韓国固有の刑法と慣習が実証法として運用されていたことを示す痕跡が多かったことを根拠としております。後者は、律令制定の問題を検討する過程で、高麗で律令が制定されたという事実を立証するのに十分な史料が見つからないことを根拠としています。しかしどの立場であれ、中国系律令の影響を受けたという点においては首肯せざるを得ないため、

高麗王朝における唐・宋律の受容過程を考察することが最優先に求められています。

10世紀高麗王朝における律は唐律を主としており、11～12世紀には宋律の影響を受けたとすることができます。しかし宋律の受容と影響は、ごく一部に現われているにすぎません。したがって、高麗で使用されていた中国系の律は、大部分が唐律から影響を受けたものと理解することができます。すなわち、『宋刑統』や宋令を受け継いだこともありましたがごく一部であり、唐律の大まかな形を示している『唐律疏議』の内容を、『高麗史』刑法志に収録されている法律条項と比較すれば、高麗律を再現できる可能性もあります。こうした点を勘案して、唐・宋律の受容過程をより具体的に考察しながら、これまでの研究成果で見過ごされてきた点を新たに整理したいと考えています。

先生方には今後多くのご指導を賜りたく存じます。ご傾聴いただきありがとうございます。 (翻訳：辻弘範)

### ◇第3回東アジア海文明セミナー「東アジア海文明における文化交流」

日時：平成17年12月14日(水) 16:30～18:00

会場：学習院大学創立百周年記念会館3階会議室

報告者：

趙榮光氏(浙江工商大学中国飲食文化研究所教授)

報告題目：「中国飲食文化的“山海経”一兼及中・日両国飲食文化的比較」

通訳：田珊氏(紹興中国醬文化博物館研究員)

コメント：天野恵美子氏(秋田大学教育文化学部専任講師)

参加者：34名

#### 【紹介記事】

第3回東アジア海文明セミナーでは、中国料理の粋を極めた「満漢全席」の復元に努める趙榮光氏より東アジア海域諸国の飲食文化の交流について、ご報告いただいた。

趙氏は中国食文化研究会首席専断家・中国飲食文化研究所所長をつとめる。このたびの来日は近く開館予定の中国醬文化博物館(紹興)の展示準備のためであり、日本各地の

醬油工場を視察された。著作に『中国古代庶民飲食生活』(台湾商務印書館、1998)、『満漢全席源流考述』(崑崙出版社、2003)など、論文100余篇。

当日は報告終了後、尹達剛氏(横浜ロイヤルパークホテル・皇苑料理長)の指導による、中国餃子の実演・体験の機会を設けた。



# 東アジア海文明における 食を通じた文化交流 —— 外来食の受容と変容 ——

秋田大学教育文化学部専任講師 天野恵美子

## 1. 日本への醤油の渡来

—— 中国醤油の伝来と日本醤油の多様化 ——

日本には、東アジアに起源を持つ多くの風習や文化があるが、今や日本の食卓に欠かせない調味料となった醤油の起源もまた、中国大陸にある。塩漬けにした食材を発酵させた醬は、魚醬や肉醬（ししびしお）といった動物性のものと、米・麦・豆などの穀類を原料とした穀醬、野菜や果物を原料とした草醬に大別される。

穀醬の渡来をめぐっては、遣隋使・遣唐使として中国に渡った僧侶や留学生らが持ち込んだとする説や、日明貿易によって中国南部の浙江省や福建省から日本に渡来し、製法が伝えられたとする説がある。中国の伝統的な醤油は、濃厚なうまみを持つが、澄んだ色はしておらず、日本の醤油は、中国とは異なる風土の中で長い年月をかけ、日本人の嗜好に応じて改良され、変化を遂げてきたものである。

日本醤油の多様化は17世紀後半から18世紀後半にかけて進み、(1) 濃口醤油：小麦と大豆を原料に作られ、国内生産の8割以上を占める、(2) 薄口醤油：素材の色を生かし、うまみを引き出すのに適している（関西で普及、国内全醤油生産量の14.1%を占める）、(3) 溜醤油：色や味が濃厚で、大豆を主原料に作られる（東海地方で普及、同1.7%を占める）、(4) 再仕込醤油：生醤油に再び麴を加えて再醸造される（同0.6%を占める）、(5) 白醤油：薄口醤油よりも淡い琥珀色を特徴とし、小麦を原料に作られる（東海地方で普及、同0.6%を占める）に分類される。地域ごとに異なる多様な醤油は、素材・調理方法などによって使い分けられ、日本の食文化に貢献してきた。今日では、キッコーマン・ヤマサ・ヒゲタなど、「関東三印」と呼ばれる大手醸造メーカーの醤油が広く普及しているが、全国各地には依然として、小規模な醤油醸造業者が2500社も存在するなど、地域ごとに異なる多様な醤油を生み出し、日本の食文化において重要な役割を担っている。

## 2. 食を通じた異文化交流

—— 日本醤油、世界へ ——

日本の食文化に深く根付いた醤油は、日本人が外来食を戸惑いながら摂取する際においても、重要な役割を果たし

てきた。例えば、明治期以降の肉食の受容や普及に際しても、長らく肉食禁忌の習慣を持っていた日本人は、西洋人の好む「血の滴るようなステーキ」としてではなく、慣れ親しんだ醤油で調味した「すき焼き（牛鍋）」として摂取した。その他の外来食との接触・受容・普及の際にも、醤油はひとかけするだけで、外来語を瞬く間に日本語に変える「優秀な通訳」、「万能調味料（all-purpose seasoning）」として、東西の食文化交流において大きな役割を果たしたということができよう。

西洋食やアジアの食が、国境を越えて行き交い、各国固有の食文化と折合いを付けながら受容され、現地で独自の変容を遂げるなど、食文化はかつてないほどまでに多様で豊かなものとなっている。近年では、海外における日本食ブームに後押しされ、醤油や豆腐、寿司やてんぷらなどの食材や料理が、洋の東西を問わず、世界中で広く受け入れられている。また最近では、アメリカ風のSUSHIに代表されるように、異文化のもとで変容を遂げたものが、再び海を渡り日本に里帰りするといった現象や、日本風のカレーやラーメンが中国に出て行くという現象も見られる。中でも、醤油は各国食文化の差異を乗り越えて、広く受け入れられ、各国固有の食文化との相互作用の中で変容を遂げ、現地の食文化との融合段階を迎えている代表的な日本の調味料である。

商学を専門にしている私は、こうした食の国際化に際して、〈文化伝播・交流経路〉の役割を担った食品企業のマーケティングに関心を持っている。企業は地道なマーケティング活動を通じて、食習慣や嗜好等が異なる環境の中で、異文化としての日本食を海外に紹介、普及させてきた。食の国際化は、かつての醤油の受容や変容と同じく、異文化における企業と消費者、現地の食文化との相互作用の中で進展している。こうした文化交流に関する研究は、流通やマーケティングのみならず、歴史・文化史など多面的なアプローチを要求しているということができよう。

中国に建設される醤油博物館は、中国の食文化研究の拠点として、重要な位置を占めていくであろう。私もまた、そこから食を通じた文化交流に関する研究成果を、大いに学び取っていきたい。

### 参考文献

林玲子・天野雅敏編（2005）『日本の味 醤油の歴史』吉川弘文館。

田村眞八郎・石毛直道編（1994）『国際化時代の食』ドメス出版。

\*本稿は趙榮光氏の講演のコメントを担当された天野先生に関連する原稿を寄せていただいたものです。

## 高麗神社—日韓関係史 のある断面—

慶北大学校講師 崔 弘 昭  
(チェ・ホンジョ)

この神社は、高句麗系の「渡来人」である玄武若光（げんぶじゃっこう：高麗若光）を主神として祀っており、私の好奇心を引くのに充分であった。奈良や飛鳥、京都等の関西地域には、古代韓国関連の文化遺跡が多く残っていることは、よく知っていたが、東京付近にも、古代韓国と関連する神社が存在することは、奇異なものとして感じられた。

周知のように、古代韓国の三国の中で最も日本と緊密な関係を結んでいたのは、百済であったが、高句麗と新羅もまた、依然として日本列島の政治勢力と頻りに交流を持っていた。この高麗神社は、この時期の日韓関係の一断面を象徴する史跡であった。645年、大和政権は関東地方に武蔵国を設け、地方支配を強化した。その際、日本列島各地に散住していた高句麗系と新羅系の人々を移住させ、その配下にそれぞれ高麗郡と新羅郡を設置した。

高麗郡は、716年に高句麗系の1799名を移住させ新設したもので、高麗神社の主神たる玄武若光は、この高麗郡の長官に任命された人物であった。彼は元々666年に高句麗からの使者として大和朝廷に派遣されたが、2年後、高句麗の滅亡によって帰国できず、大和朝廷から出身地の「高麗」を姓として下賜され、高麗若光と呼ばれるようになった。高麗神社は、若光の死後、高麗郡民が霊廟を建て、彼を「高麗明神」と称し、守護神として奉じたことに由来し、現在に至るまで、若光の直系の子孫たる高麗氏一族が、この神社を継承している。

このため、この神社はとりわけ韓国人が、親近感を寄せる遺跡のようであった。例えば、「高麗神社」と掲げられた社殿の扁額の筆者は、韓国人（朝鮮人）であると明記され、また、扁額の「高」と「麗」の字の間に小さく「句」の字が書き加えられていたのが印象的だった。韓国人は、普通「高麗」といえば、三国時代の「高句麗」ではなく、王建が建てた「王氏高麗」と思うので、両者を混同させまいとする筆者の配慮を読み取ることができた。

更に、最近建てたと思われる神社入口のチャンスン（天下大將軍、地下女將軍の像）も、韓国系日本人や韓国人観光客を意識したものと思われた。また、神社に奉納された絵馬に、ハンゲルで記された発願がしばしば見られたことも、高麗神社に対する韓国人の思いを反映していた。鳥居

を入ってすぐの境内で、思いがけず見つけた、大韓帝国の英親王と李方子女史が植えた木も、私にとって、韓国近代史の悲しい側面を目撃した瞬間だったが、この神社の韓国との深い関係を示すものとして理解できた。

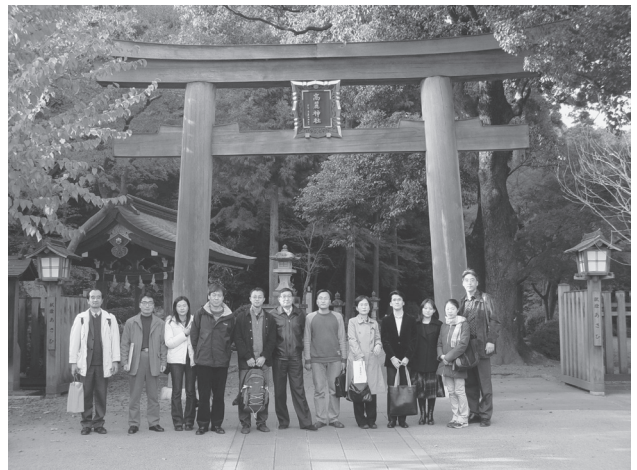
他にも、神社の周辺には高句麗の遺跡が数多く残っていた。神社の裏手にある、若光の子孫が居住していた高麗氏旧宅（国指定重要文化財）のほか、神社から程近い寺である聖天院も、751年に若光の追慕を目的として創建された。本尊の聖天尊は、若光が高句麗から持参した守護仏であると伝承され、ここにも高句麗の残照が見受けられた。そして、高麗郷、高麗山、高麗川、高麗駅などの地名は言うまでもないだろう。

2005年は、所謂「日韓友情年」であり、韓国では、日本に関係した歴史的な事件の周期が集中する年でもあった。乙巳条約（第二次日韓協約）100周年、植民地解放60周年、韓日協定（日韓基本条約）40周年などに当たる。この歴史的な時に、生涯初めて日本を訪問し、高句麗の余韻の深く残る高麗神社を調査できたことは幸運であった。

学習院大学と中国の復旦大学、そして、慶北大学校が共同参加する『東アジア海文明の歴史と環境』プロジェクトの遠大な目的の一つが、東アジア地域の平和共同体の構築であり、その前提として、研究者間の「知識共同体」ないしは「学問共同体」の形成が必要とされる。そのために、微力ながら私でも役に立つことができるだろうかと考え、身の引き締まる思いがした。

末筆となりましたが、調査過程の豊富な資料と関連史料を準備して頂き、また、詳細に説明をして下さった史学科の鐘江宏之先生と、国際学術シンポジウムにご招待頂いた、同大学アジア研究教育拠点事業事務局の皆様方に、深く感謝致します。

(翻訳 大多和朋子)



# 中国東北地区調査記

学習院大学特別研究員 下田 誠

私は中国古代国家の形成過程と交通・環境との関わりを研究調査する対象として趙文化に注目している。中国東北地区（瀋陽・長春）と北京の大学・博物館においては、趙文化を研究する考古学・歴史学・文字学研究のスタッフを多数擁し、また趙文化に関する出土・伝世資料を展示する博物館を持つ。こうした地域の大学研究者と交流を進め、博物館所蔵の概要をつかむことは、自身の研究においては不可欠であり、実際に今回の派遣により、充実した成果を得られた。日程は12月23日（金）～31日（土）の9日間である。

23日から3日間、筆者は大連に滞在した。大連はもと「青泥洼」（『新唐書』卷四十三下志第三十三下地理七下・登州海行入高麗渤海道）と呼ばれ、現在も通りの名前として残されている。大連はまた黄海・渤海の分岐点にあり、二〇三高地より望むことができる。ここで筆者の浅薄な近代史を述べる必要はあるまい。旅順までの道のりには昆布の養殖が多く見られた。なお、大連―煙台間（165 km）には多数の小島がつらなるが、航海によって使節往来の歴史を体感することも希望するところである。

26日から2日間、長春に滞在した。東北師範大学は筆者が修士課程の時、1年間滞在した場所である。このたび、博士学位申請論文の執筆を終え、かつての指導教授、詹子慶先生への訪問を果たした。研究室では張文安氏（陝西師範大学・神話学）・謝乃和氏（東北師範大学・先秦史）らと交流し、筆者の執筆中の「戦国趙の邯鄲遷都と禹河」（国際学術シンポジウム「黄河下流域の生態環境と東アジア海文明」報告集所収）に関する意見を求めた。詹先生はちょうど往年の集大成『古史拾零』（東北師範大学出版社、2005年）を出版されたところ。古代国家論を志す筆者に

とって、突きつけられた課題は大きい。吉林大学では王建华氏より中国東北地区青銅兵器の関連論文につきご紹介いただいた。

28日、瀋陽では旧友の王美華氏と面会、新設の唐宋史研究所の概況につき説明を受け、遼寧省博物館を参観。30日北京では詹先生の教え子である宮長為氏より懇意に社会科学院のご案内をいただいた。古籍室では多くの漢籍のほか侯外廬旧蔵本も収められていた。宮氏は先秦史研究会の秘書長であり、かつ、一昨年改名された邯鄲学院の紀要（『邯鄲学院学報』）の編集委員もされている。邯鄲学院は趙文化研究の拠点の一つであり、筆者の今後の研究にとって、同地区の研究者との交流から学ぶところも多いだろう。

話は前後するが、29日には国家図書館において、現在、筆者が進める青銅兵器よりみた武靈王改革の再検討に関連して資料収集を行った。また本事業と関連して海洋出版社を訪問し、設立経緯・出版状況など調査した。



## 彙報

### ◇シンポジウム

国際学術シンポジウム

「黄河下流域の生態環境と東アジア海文明」

日時：平成17年11月27日（日）9：00～18：00

会場：学習院創立百周年記念会館小講堂

\* 報告者及び報告内容については3頁参照。

### ◇フォーラム

第1回：1月18日（水）18：00～19：00

於北2号館10階大会議室

「東アジア海文明への道」（鶴間和幸／学習院大学文学部教授・鐘江宏之／学習院大学文学部助教授）

参加者：24名

第2回：3月3日（金）16：00～18：00

「楼蘭と東アジア海文明」

於学習院大学西2号館301教室

「東アジアにムギをもたらした人びと～小河墓地の発掘～」  
（イディリス・アブドゥラスル／新疆文物考古研究所所長）

コメント 井上隆史／NHK エグゼクティブプロデューサー

通訳 黄曉芬／東亜大学総合人間・文化学部教授

参加者：60名

第3回：3月17日（金）15：30～17：00

「琉球の歴史と東アジア海文明ネットワーク」

於琉球大学

司会 鐘江宏之／学習院大学文学部助教授

「東西軸と南北軸で沖縄を捉える」

（諏訪哲郎／学習院大学文学部教授）

「『おもろさうし』にみられる北方的文化要素」

（福寛美／学習院大学非常勤講師）

コメント 張東翼／慶北大学校師範大学教授・禹仁秀／慶北大学校師範大学助教授

参加者：30名

第4回：3月22日（水）9：00～11：30

「譚其驥歴史地理講座」

於復旦大学文科楼八楼歴史地理中心会議室

司会 葛剣雄／復旦大学歴史地理中心教授

「海の環境から歴史を読み解く～東アジア海文明史の構築に向けて」  
（鶴間和幸／学習院大学文学部教授）\*

「東アジア海文明史における運河の意義」

（浜川栄／共立女子大学非常勤講師）\*

「4～6世紀の華北平原と遼東・遼西の諸民族」

（市来弘志／学習院大学非常勤講師）

「東アジア海域におけるソグドネットワーク研究計画」

（森部豊／関西大学文学部助教授）

「東アジア海文明と水利技術」

（村松弘一／学習院大学東洋文化研究所助手）\*

「黄河下流域に対する研究の視点について」

（菅野恵美／文教大学非常勤講師）

「3～6世紀における中国・朝鮮半島・日本の文化交流」

（中村威也／大江戸高校非常勤講師）\*

「東アジア海文明の形成と河川の影響—春秋戦国期の大河に対する認識から—」

（水野卓／慶応大学大学院博士後期課程）\*

「遊女の様相を通じて見る東アジア海」

（大多和朋子／学習院大学大学院博士後期課程）\*

「衛星画像を利用した前漢期黄河故河道の復元」

（長谷川順二／学習院大学大学院博士後期課程）\*

「東アジア海とソグド人の商業ネットワーク」

（福島恵／学習院大学大学院博士後期課程）\*

「東アジア海域における国家形成と青銅兵器研究」

（下田誠／東京学芸大学非常勤講師）\*

参加者：44名

第5回：3月25日（土）14：00～17：00

「東아시아海文明 FORUM」

於慶北大学校師範大学愚堂教育館201号第1セミナー室

第4回報告者名のあとに\*を付した研究者が報告した。

参加者：40名

(大多和朋子／学習院大学大学院博士後期課程)

◇セクション・スタディ・ミーティング (SSM)

第1回：1月19日(木) 18:00～19:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「水と人の東アジア海文明史を考える」

(村松弘一／学習院大学東洋文化研究所助手)

「中国東北地区調査報告」

(下田誠／東京学芸大学非常勤講師)

参加者20名

第2回：2月27日(月) 17:00～18:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「遊女の様相を通じて見る東アジア海—川・津・舟—」

「ソグド人と東アジア海—日本におけるソグド人の形跡—」

(福島恵／学習院大学大学院博士後期課程)

参加者16名

第3回：3月15日(水) 17:00～18:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「黄河下流域の空間への視点」

(菅野恵美／文教大学非常勤講師)

「前漢期黄河河道復元～内黄県三楊莊遺跡と前漢黄河の関連～」

(長谷川順二／学習院大学大学院博士後期課程)

参加者14名

随想

東京滞在記

学習院大学で開かれた『東アジア海文明の歴史と環境』のシンポジウムのあいまに、時間を割いて靖国神社を観覧した。靖国神社は韓国でもマスコミの報道を通じて十分に聞いていたため、一体どのようにして成立したものなのかと、大変気になっていたためであった。

この神社は、そもそも明治維新直後に亡くなった皇軍を神格化し、彼等の靈魂を慰めるために建立された国家神社であると理解していた。名称も、当初は「東京招魂社」で、皇室から直接奉祭されるほど、その格式は高かった。その後、軍事的性格が一層強化され、現在の靖国神社へと名称が変わった。

平日の午前中にもかかわらず、人々の歩む列は続いていた。

外国のどこを訪問する際も、その場所に対し、現地の人々の考え方と立場をまず理解することが正しいと考えてきた。それでも、大韓民国の国籍を持つ私の立場では、靖国神社に対しては、第三者の観点を維持することが、とても難しいことを否定できなかった。中曾根康弘元総理の最初の公式参拝以後、現在の小泉純一郎総理に至る参拝問題を考えざるを得なかった。

東北アジアもしくは東アジア共同体議論が盛んである今

日、各国の協力や共同体実現のための条件が、何であるかを理解するため、積極的な姿勢を取らなければならない。この状況において、自ら払った犠牲のみを思い、周辺国の苦痛に対しては考えが及ばないのかと、私は理解ができなかった。東北アジアの平和のため、まず第一にすべきことは何かを考えているのだろうか。

靖国神社問題は、周辺国の国民にとって大変敏感な問題である。これに対し、日本の最高指導者層が全く理解を持たないはずはないのに、参拝の断行を継続していくことには、すんなりと納得はできない。勿論、日本人皆がこれに対し賛成の反応を示すと考えているのではない。国際的な関係を考慮すれば、日本が進むべき正しい発展の方向を提示する人々もいる。但し、そこに如何に多くの日本国民が耳を傾け、また、如何に多くの指導者層が心を尽くして考えぬかが問題となるだろう。

神社の隣の戦争記念館である「遊就館」にも団体観光客の行列が長く続いていた。中国戦国時代の『荀子』に曰く「高潔な人物に従い学ぶ」から意味を取った遊就館である。記念館に対する日本人の考えが、名前によく表されている。成人のみならず、幼稚園の子供たちも観覧のため団体で多く来ていたが、来て、見ることでどのような気持ちで帰るのだろうか、ふと考えずにはいられなかった。

(文・李志淑)



2005年11月27日の国際学術シンポジウム「黄河下流域の生態環境と東アジア海文明」における鶴間和幸教授の報告

## 編集後記

『ニューズレター海雀 Umi-Suzume』第1号をお届けします。

海雀は日中渡り鳥協定で渡り鳥として認定されている鳥です。太平洋北部の海域で見られ、冬期は南下して、中国東海岸・台湾まで見られるそうです。小魚を食べて生活をしているので、昔、漁船はこの鳥を目標にして魚の群れを探しあてたそうです。もちろん、韓国でも生存が確認されています。海雀とともに、東アジア海をはばたきたいという思いからニューズレターの名称としました。

「東アジア海文明の歴史と環境」の活動にどうぞご期待ください。

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業

「東アジア海文明の歴史と環境」

ニューズレター海雀 Umi-Suzume 第1号

発行編集：学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

Tel：03-3986-0221（内線5743）Fax：03-5992-9218（人文科学研究所）

e-mail：[asia-off@gakushuin.ac.jp](mailto:asia-off@gakushuin.ac.jp)

HP：<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>

発行日：2006年6月10日

印刷：株式会社理想社

